

〈本文〉

一柳軒不卜のぬしは、身を塵境に随ひせまりて、心ざしは雲あるやまのいはねをたどり、あるはよしのゝ花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅のやつことなる事としあり。これよりさきも集頭す事ふたゝびに及といへども、春秋遠く、雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさま／＼に、唐朝の牡丹も花しべを異にす。梅の侘、桜の興も、折にふれ時にたがへば、句も又人を驚しむ。猶其しげき林に入て、花のかのきよきにつき、いろこき木の葉をひろひて、左右にわかちて、積て四節となす。判士よたりに乞て、我も其一にしたがふ。まことや、楽にゑらるゝものゝ笛をぬすむに似たり、といはむ。されども、青鷺の目をぬひ、あふむの口を戸ざゝむことあたはず。貞享うのとし、筆を江上の潮にそゝぎて、つゝに蕉庵雪夜のともし火に対す。桃青書

〈現代語訳〉

一柳軒不卜の主は、身を俗世間に置き、その習いに従つてはいても、志は雲のかかる山の岩根をたどるように、高い境地をめざしており、ある時は笈の重みに耐えつつ吉野の花に遊び、ある時は琵琶湖に舟を浮かべて月に琵琶を弾じるなど、風雅の奴として長年を過ごしてきた。これまでに集を出すことが二度あったとはいえ、それも昔時のことで、その間に万物は変化し、淵明が詩に詠んだ菊も、唐朝の人々に愛された牡丹も、名や姿をさまざまに違えている。梅や桜の興趣として時節に応じて変わるもの、句もまた新しい見方を示したものは、人を驚嘆させることになる。編者は俳諧という名の林に猶も入り込み、余情と表現力に富んだ句を拾い出し、左右に分けて句合とし、四季それぞれにまとめた。判士を四人に依頼し、私もその一人として列に連なっている。まったく、故事にいう「楽に選らるる者の笛を盗むにたり」とはこのこと。しかしながら、青鷺の目を縫い、鸚鵡の口を閉ざすことができないように、具眼の論者にはすべてお見通しで、批判は免れないであろう。

貞享丁卯の年、筆を河畔の潮に洗い、雪の夜の芭蕉庵で灯火に向かう。 桃青書

* 「一柳軒不卜」は『続の原』の編者である岡村不卜。「風雅のやつこ」は、風雅に取り憑かれ俳諧に専心する者の意であろう。「集頭す事ふたゝび」は、不卜が延宝六年に『江戸広小路』、同八年に『俳諧向之岡』を刊行したこと。「雲ゆき雨ほどこして」は『易経』の「雲行キ雨施シテ品物形ヲ流ス」を踏まえ、万事は変わることをいう。「東籬の菊」は陶淵明「飲酒」の「菊ヲ採ル東籬ノ下」を踏まえる。「唐朝の牡丹」は周茂叔「愛蓮説」に「李唐ヨリコノカタ世

人甚ダ牡丹ヲ愛ス」とあるように、中国人が好んだ牡丹の意。江戸時代は園芸が流行し、品種改良による菊・牡丹などの新種も多く生まれた。「梅の侘、桜の興も、折にふれ時にたがへば、句も又人を驚しむ」は、そのことを踏まえ、梅・桜の興趣も時節に応じて変わるのだから、句も改良を重ねることで人を驚嘆させうる、ということか。あるいは、不卜の句や不卜の選んだ句がすでに時流を越えている、と賞賛したものか。「花のかのきよきにつき、いろこき木の葉をひろひて」は、すぐれた作品を選んだということ、色」は表現、「香」は余情をいうか。「判士よたり」は本書の句合に判を施した素堂・調和・湖春・桃青の四人。「楽にゑらるゝものゝ笛をぬすむ」は、斉の宣王が三百人の楽士に笛を吹かせた際に、実力のない南郭は中にまぎれてごまかしたという、「南郭濫吹」の故事（『韓非子』）により、判士をする力のない自分がまじっていることをいう謙遜の辞。「青鷺の目をぬひ、あふむの口を戸さゝむことあたはず」は、よく見える青鷺の目をふさぎ、よくしゃべる鸚鵡の口を閉ざすことはできない、ということ、具眼の読者、論の立つ読者を想定したものである。「貞享うのとし」は貞享四年。「江上の潮に」は隅田川のほとりにさして来る潮で、芭蕉句に「名月や門に指くる潮頭」（『芭蕉庵三ヶ月日記』）がある。